

## 「(プログラム名称を記入) 参加報告書」

京都大学文学部2年鈴木悠介

- ① 今回の留学ではまず、海外の学生と自分との学習能力の差を感じた。自分よりはるかに中国語を学んでいる期間が短い学生が自分と同じもしくはそれ以上の学力を持っていることが多くあった。特にそれはリスニング能力という点に顕著に現れていたように思う。そういった学生はやはり授業中の発言等も積極的であった。語学の習得にはそういった意欲的な態度で学習すること、失敗をおそれず少しでも多く使用することが重要であると感じた。国内ではこんなに多くの外国の学生と同じ目標のもとで交流する機会はなかなか得られないだろう。自分の今までの学習を反省し、これからの学習に生かすまたとない機会となった。  
また外国の学生と交流していくなかで、自国の政治や文化に無関心であったことを非常に恥ずかしく感じた。中国と日本との政治関係について聞かれたり、日本固有の文化について聞かれたりすることが多々あったがうまく返答できなかった。自国への関心もこれからの課題であると気づかされた。
- ② 交通マナー、食事、そして衛生環境。これらに非常に大きな衝撃を覚えた。日本を外部から見つめてみることで、日本がいかに恵まれた環境か改めて考えさせられる良い機会となった。
- ③ プログラムは3週間で、授業は午前中だけであった。しかし朝が非常にはやく、予想以上に厳しいスケジュールだった。短い期間だからこその限り中国を満喫しようと、午後は観光に費やした。休みの日には滞在先である南京を離れることもあった。中国の食事がどうしても口に合わないと感じていたが、この短い期間だったからこそ乗り越えることができたと思う。
- ④ 外国人日本人問わず、いろんな専門分野を持つ人々に会うことができた。国際系の学部にも所属し、言語を専門とする人もいたが、それ以外の方も多くいた。中国の六朝時代の歴史を専門とする人、中国文学を専門とする人、中国経済を専門とする人、日本史を専門とする人、外務省の派遣で来ている人など、様々な人が自分の目的を達成するために日々奮闘していた。自分はまだ専門が決まっていなかったが、彼らとの出会いのなかで中国に惹かれたことは言うまでもない。また、中国語だけでなくほかの言語も学んでみたいと感じるようになった。それは現代使用されている言語に限ったことではない。このプログラムに参加するまでは自分の興味関心はなんなのか、なにを研究したいのか不明確なままだった。しかしこのプログラムに参加することで、少しでも他国の言語に携わってみたいという思いが自分のなかにあることに気がつくことができた。この思いをどのようにこれからの進路に生かしていくかはまだ見えてこないが、自分にとってこのプログラムは大きな成長の糧になったと思う。